

ルポ 地域おこし ひと

びと

1960(昭和35)年に福岡県で生まれた福永栄子(52)は12〜15歳の時期をイタリア・ローマで過ごした。82(同57)年には上智大外国語学部を卒業。卒業後は日本郵船に就職。副社長付の秘書官として通訳などの業務に励んでいた。順調に進んでいても福永の心にひっかかるものがあった。それは大学時代の教授で、後に国連難民高等弁務官となった緒方貞子の言葉。外交官を目指していた福永に「あなたは国際公務員が向いている」。国際公務員に当時女性は少なく、女性ならではの視点が生かせるとの説明もあった。そ

福永 栄子さん(宮崎)

誌編集長 内編 案さ 旅のちみ

の言葉は福永の心に強く残り、結局は会社を退職。高校教諭を経て活躍の場を海外に移すことになった。

96年、米国ロサンゼルスで日本人幼児の心臓移植受け入れボランティアの代表者となり、多忙な毎日を送っていた。教師の経験を生かし、海外在住の子どものために日本人図書館も設立した。

ところが、充実した毎日
は長く続かなかつた。福永
は持病のぜんそくを発症、

病院へと運ばれたのだ。気付けとICR(救急救命室)に入れられ、点滴を受けることになった。98年2月のことである。アレルギー体質で薬には十分に気を付けなければならぬ。心臓が動きを止めた。



米国滞在時の福永(右)。充実した毎日を送っていたが医療事故に遭う

「生きていることが不思議だ」。目を覚ました福永を待つていたのは厳しい現実だった。半年間寝たきりの状態が続く。言葉も満足にしゃべることができない。日本に帰れたのは半年後の8月。飛行機に乗ったが肺炎にかかってしまい、到着後すぐに病院へ。入退院を繰り返して、何とか落ち着いたのは帰国してから約2年後だった。

「恥ずかしながら当時、鹿児島に滞在していると思っていた。後に自分が宮崎で療養していたことが分かり、自分を救ってくれた土地をもっと他の人に知ってもらいたくなった」。東京に帰るつもりでいた福永は宮崎に永住することを決意した。俗に言う「Iターン」。

「IターンのIは愛情の愛なんです」

療養を機に永住決意

(敬称略)